

ICID アジア地域会議・第 75 回国際執行理事会 帰国報告会 及び 第 20 回 若手かんがい排水技術者のための勉強会（YPF 勉強会）

令和 7 年 3 月 7 日（金）にビジョンセンター東京八重洲において、ICID アジア地域会議・第 75 回国際執行理事会 帰国報告会及び第 20 回 若手かんがい排水技術者のための勉強会（YPF 勉強会）を合同で開催した。

帰国報告会では、昨年 9 月 1 日～7 日にオーストラリア・シドニーにおいて開催された ICID 第 9 回アジア地域会議及び第 75 回国際執行理事会に参加した日本 ICID 協会委員 4 名から、会議での講演内容の紹介の他、会議の様子などについてご報告いただいた。

YPF 勉強会では、「第 4 回世界かんがいフォーラムのサブテーマ 4 について、日本として発表する場合どのようなポイントを主張するべきか」とのテーマについて、参加者を 4 グループに分け、グループディスカッションを行い、検討結果を発表した。

報告会及び YPF 勉強会には、農林水産省、研究機関、民間企業、大学教員、大学生等計 26 名が参加した。

プログラム

➤ 帰国報告会

14 : 00 ～ 14 : 15	開会挨拶（結果概要報告） 農林水産省海外土地改良技術室課長補佐 藤本 敏樹 氏
14 : 15 ～ 14 : 45	国内委員による成果報告 加藤 委員（東京農工大学農学研究院）
14 : 45 ～ 15 : 05	若手技術者による成果報告① 小田 広希（東京大学大学院）
15 : 05 ～ 15 : 25	若手技術者による成果報告② 金子 貴信（新潟大学大学院）
15 : 25 ～ 15 : 45	若手技術者による成果報告③ 大塚 健太郎（岐阜大学大学院）
15 : 45 ～ 15 : 55	総括 ICID 国内委員長 渡邊 紹裕 氏

➤ YPF 勉強会

16 : 10 ～ 16 : 15	趣旨説明 日本 ICID 協会 WG-YPF 代表 宮津 進 氏
16 : 15 ～ 17 : 25	ワークショップ
17 : 25 ～ 17 : 30	閉会挨拶 日本 ICID 協会会長 奥田 透 氏

○講演概要

1. 帰国報告会

(1) 国内委員による成果報告：東京農工大学農学研究院 加藤 亮 委員

ICID の近年の動向として、SDGs に即して提唱された Vision 2030 の概要、それを実施するための Working Body とその再編について、他国との関係とともに日本として何をもちたすべきかご説明いただいた。

日本からの提案としては、①気候変動対策（適応策、緩和策）として、AWD や間断灌漑（メタン）、スマート農業、灌漑排水設備と基盤整備、生態系サービスの向上、②農業による防災、減災の面からは田んぼダム、貯留機能、ため池事前放流、予測モデルやハザードマップ、レジリエンスの向上、③参加型管理（土地改良区のシステム）からは自動化、需要主導への転換、組織化・リーダー育成、地域との融合（ツーリズム等との連動）、④キャリアディベロップメント、若手の育成としては、日本の大学での育成、日本の事例を学ぶ、奨学金制度を挙げた。

加えて、ICID アジア地域会議における、留学生分の発表として「湿地帯における流出量に関する温暖化の影響評価」、「ラオス国ビエンチャン市の都市拡大と水田面積の縮小およびそのメカニズムの解析」の概要説明及び国際ワークショップ WG-NCWR での「千葉県印旛沼の循環灌漑地区における水収支および水田流出メカニズムに関する研究内容で、干ばつ年（2022年）と通常年（2021年）の流出率や循環灌漑状況の比較に関する報告」について概要をご説明いただいた。

(2) 若手技術者による成果報告①：東京大学大学院 小田 広希

（報告の概要）「タイ東北部における雨季米作付面積推定モデルの構築と気候変動影響評価」と題し、作付時期の違いを考慮した作付時期・面積推定モデルを構築して、現在気候・将来気候での作付時期・面積の推定をおこなった。その結果、タイ東北部の作付日は、1980年代から2010年代にかけてばらつきが大きくなり、遅れてきていることがわかった。この作付けが遅れる傾向は、2050年代まで続き、2060年代からは降水量の増加により早期化することが予測された。この作付けの遅れが大きくなればなるほど、地下水灌漑やポンプ灌漑などの一時的な水利用が合理的になると考えられる。

(3) 若手技術者による成果報告②：新潟大学大学院 金子 貴信

（報告の概要）「開発途上国における機械学習を用いた氾濫予測」と題し、水利施設の運用を支援するツールの構築を目的とした機械学習による氾濫予測手法を構築した。洪水時にリアルタイムで予測するためには、計算不可の小さい機械学習モデルが適しているが、一方で大量の学習データが必要となる。そこで、物理プロセスモデルを用いて学習データを創出することで、短時間で高精度な予測が可能となった。

また、次回の派遣プログラム参加者に向けて、発表当日の1日の流れを示したほか、派遣にかかる費用等についても紹介した。

(4) 若手技術者による成果報告③：岐阜大学大学院 大塚 健太郎

（報告の概要）次回の派遣プログラム参加者に向けて、若手技術者派遣プログラムを用いた ICID ア

ジア地域部会派遣の流れを出国前の準備から、発表概要と質疑内容、会議期間中の過ごし方等について紹介した。

今回の派遣を通して学んだことは、①海外における議論を通じ、バックグラウンドが異なる人との対話の難しさを感じることができた。②テーマに沿った要旨・発表を準備が重要である。③部会期間中は産官学が集まる機会に恵まれ、特に普段接点の少ない産官との交流は大変貴重な経験であった。④学会と会議の違いを感じた。

2. YPF 勉強会

グループディスカッション：第4回世界かんがいフォーラムのサブテーマ4について、日本の研究者として発表する場合どのようなポイントを主張すべきか、また、ポイントをわかりやすく伝えるために何をプレゼンすべきか（日本の事例、研究成果・・・）。

論点①：日本の研究者としてどのような主張をすべきか。

論点②：主張に当たってどのような素材を活用すべきか。

上記の議題と2つの論点について、参加者をA～Dグループの4グループに分け、自己紹介10分、検討時間60分のグループディスカッションを行い、それぞれ検討結果を発表した。

各グループの発表内容は以下のとおり。

グループA：気候変動を軸に、資源活用の最大化から里山の保全、持続的資源の管理として流域治水を主張すべきと考えた。主張に当たっては、日本のバックグラウンドを説明した上で主張することや、視覚に訴える説明等が重要であると考えた。

グループB：流域治水と生態系保全に対する複数案を主張すべきと考えた。主張に当たっては学術的なアプローチとして、定量的に説明することが重要であると考えた。

グループC：「日本の強みを生かしたNbS」と題し、日本の強みとして、①水田産業②かんがいインフラ整備③共同管理組織を軸に、それぞれ当てはまる事例（ワンド、魚巢ブロック等）を活用し主張すべきと考えた。

グループD：「スマート田んぼダム」を軸に、日本で用いられている流域治水のみのアプローチだけでなく、観光資源や、水田養殖への利用等の可能性について、主張することが有効であると考えた。

○会議の状況
【帰国報告会】



農林水産省 海外土地改良技術室 藤本課長補佐より 開会挨拶・概要報告



国内委員による報告
東京農工大学農学研究院 加藤教授



若手技術者による報告①
東京大学大学院 小田 広希氏



若手技術者による報告②
新潟大学大学院 金子 貴信氏



若手技術者による報告③
岐阜大学大学院 大塚 健太郎氏

【YPF 勉強会】



日本 ICID 協会 YPF 宮津代表による趣旨説明



A グループ 検討状況



A グループ 発表



B グループ 検討状況



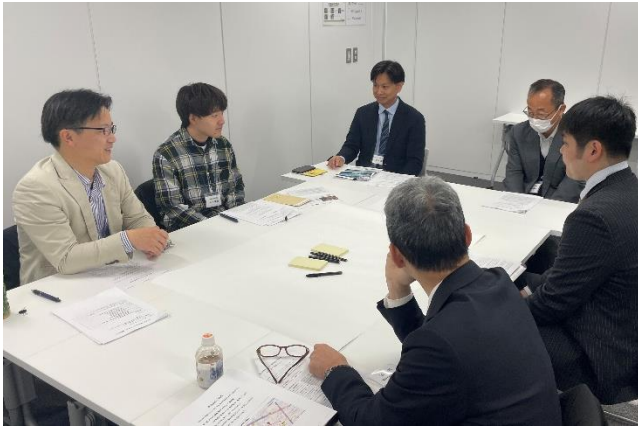
B グループ 発表



C グループ 検討状況



C グループ 発表



D グループ 検討状況



D グループ 発表